

少年少女
のための 国民文学



軍記名作集

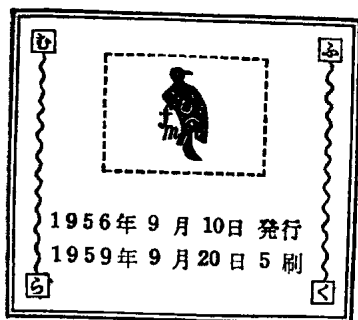
の国民文学

軍記名作集

福田清人



福村書店刊



福田清人先生の略歴

明治三十七年長崎県に生れ、昭和四年東京帝国大学国文科卒業。編集者生活後文学生活に入る。代表作「若草」「国木田独歩」等。ほか日本文学研究の著が多く、少年少女のために小説「暁の少年たち」「夏目漱石」等がある。実践女子大学教授。日本文芸家協会員・日本児童文芸家協会理事。
現住所 東京都杉並区成宗二ノ七二〇番地

少年少女のための

国民文学 ⑤

一 軍記名作集 一

定 価 330 円

著 者 福 田 清 人

発 行 者 福 村 保
東京都文京区真砂町36番地

印 刷 者 谷 上 実
東京都台東区上野山下町2番地

印 刷 所 弘済印刷株式会社
東京都台東区上野山下町2番地

発行所 東京都文京区真砂町36番地 株式会社 福村書店
電話小石川(92) 660・4664番
振替口座東京78313番





は し が き

平安朝の貴族文化がほろび、それにかわって、武士がおこって、天下を支配したのは、十三世紀の初めごろからでありました。そのもつともいきおいのあったのが、源氏と平氏で、ついに源氏がおこる平家をうちほろぼし、源頼朝が、鎌倉に幕府をひらきます。

その日から約四百年、徳川幕府が江戸におかれるまでを、鎌倉・室町時代とよびます。それは、十六世紀の末におよんでいます。

このあいだに、あいつぐ戦いのありさまを、勇ましさのなかにあわれさをこめて書いた物語が、いくつも世にできました。

それは、前の平安朝にでた、歴史を和文で書いた「栄華物語」や「大鏡」などの歴史物語の尾をひいて、和文に漢文調をおりませて書いてあるので、平安朝のやさしい、多く女子の手になる文学よりも、力づよい文体になっております。

まず、「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」など、源氏平氏の戦いを中心にしたものから、下って、鎌倉幕府がたおれ、室町幕府ができるまでのことを書いた「太平記」などがあります。



ここにはまず、軍記物語のはじめである「保元物語」「平治物語」をとりあげました。「平家物語」は別に一巻、この双書ででております）
こういう軍記物語は多くの人物をだして、戦いの時代を背景にして描かれておりますが、ほかに、個人を中心にした軍記もあります。

源義経の生涯を書いた「義経記」もそれであり、ここにそれを取りました。義経は、判官びいきといふことばもあるように、国民にたいへん愛されている武将ですが、この「義経記」には、その勇ましい部分の多くは記してなく、その若い日と、英雄的なふるまいをしたあと兄の頼朝からうとんぜられて、かなしい最後をとげるあたりがくわしく書かれております。「保元物語」の源為朝の勇ましさに心ひかれるみなさんは、義経のあわれな生涯に涙ぐまれるでしょう。また、この勇ましくあわれにみちた物語から、その後、別の芝居や物語の題材ともなつて、これらの話は私たちにつたえられてもおります。

なお、本書中「保元物語」「平治物語」のさし絵は「日本歴史図解」より、「義経記」の分は「義経一代実記」（春章画）からとりました。

昭和三十一年初秋

福田清人

軍記名作集 目次

保元物語

乱のおこり

勇ましき為朝

夜うちの計

はげしい戦い

戦のはて

平治物語

信頼と信西の仲たがい

平清盛と源義朝

二

五

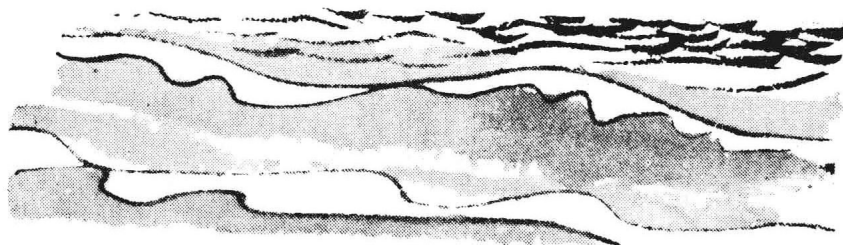
八

一八

二三

三五

三七



御所の焼討ち

三八

信西の最後

四〇

悪源太義平

四二

合戦のあと

四七

頼朝と弟たち

四九

平家ほろぶ

五三

義経記

牛若丸の巻

おさなき牛若

五五

正門房のすすめ

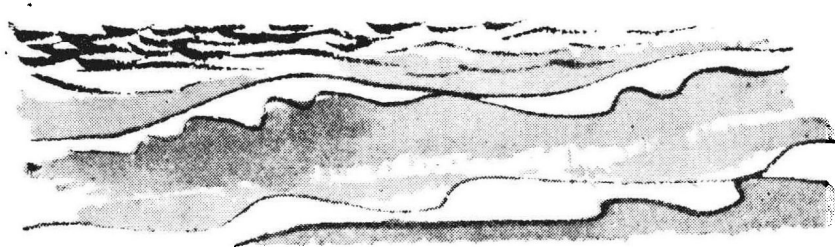
五七

牛若貴船もうで

六〇

金売り吉次の物語

六三



牛若鞍馬を出る

六

北国行の巻

鏡の宿の強盗退治

七

元服

七

阿野禪師に對面

七

陵の館を焼く

八

最初の家来伊勢三郎

八

秀衡との對面

八

鬼一法眼

七

井慶の巻

熊野の別当の乱行

六

弁慶誕生

二



弁慶、誕生寺を出る

一〇三

書写山燃ゆ

一〇四

弁慶の太刀奪い

一〇六

義経、弁慶君臣のちざり

一一二

義経、奥州より出兵

一二六

都落ちの巻

義経、頼朝に対面

一二九

平家追討

一三三

土佐坊、義経の討手となる

一三八

義経の都落ち

一四七

住吉、大物の二合戦

一五三

風雲の巻



義経、吉野入り

一五

静、吉野山に捨てらる

一六

義経、吉野落ち

一五

忠信、吉野山にとどまる

一六

忠信、吉野山の奮戦

一七

吉野法師、義経を追う

一七

静御前の巻

忠信の最後

一八

義経、奈良にしのぶ

一四

勧修坊、関東より呼出される

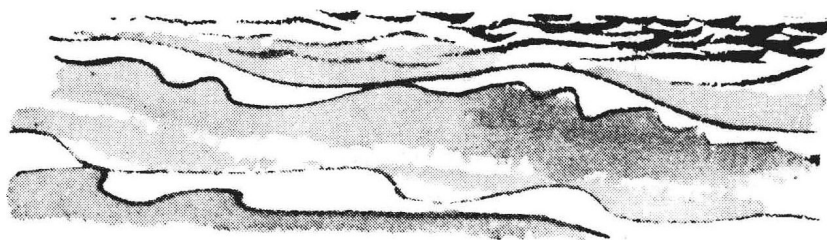
一六

静、鎌倉へ下る

一六

静の舞

一五



流浪の巻

義経の北国落ち

二〇〇

大津次郎

二〇六

三の口の関

二〇九

長い旅

二一四

如意の渡

二一六

笈さがし

二一八

亀割山のお産

二二三

義経、平泉に着く

二三四

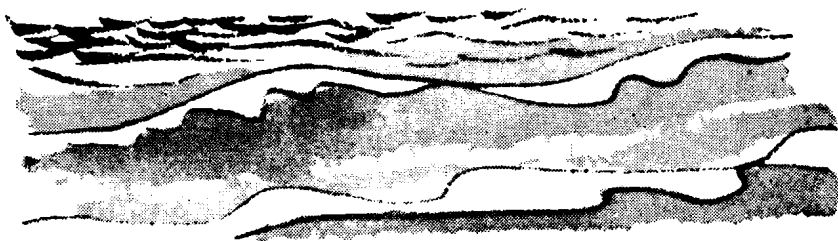
落日の巻

佐藤兄弟のとむらい

二三七

秀衡の逝去

二三八







保元物語がたり

乱のおこり

「崇徳院が、たいそうはらをたてておいでになる。今にきつと、なにか一大事がおこるだろう」

朝廷に出入りする人々は、みんなそうかんがえていた。崇徳院の御父鳥羽院は、嘉承二年（西暦一一〇七年）に即位、十六年間位についていられたのちに、第一皇子である崇徳院に位をゆずられたのであった。

崇徳院はたいへんよい政治をなさったので、世の中はさかえ、国民もしあわせであった。

ところが鳥羽院は、とつぜんむりやりに崇徳院を位からおろして、そのあとへ、わずか三歳におなりになった皇子を位におつけになったのである。これが近衛天皇なのであるが、そのために、崇徳院と御父鳥羽院とのなか

が悪くなられたのも、むりのないことである。

崇徳院は、近衛天皇のつぎには、せめてごじぶんの第一皇子重仁親王を、位につけたいとねがっておられた。朝廷に出入りする人々も、みんなそうかんがえていたのである。それにもかかわらず、近衛天皇が十七歳でおなくなりになったあとへは、鳥羽院の第四皇子が位におつきになった。崇徳院のおはらだが、ますますひどくなられたのはあたりまえのことで、世間の人々も、そのことをうわさしては、なにかいやなことがおこりはしないかしんばいしていたのであった。

保元元年（西暦一一五六年）鳥羽院がなくなられた。その前の年に、鳥羽院が、熊野権現へおまいりなさった

とき、権現さまのおつげがあつて、

「あなたは来年の秋ごろにかならず死ぬ。そしてそののちに、世の中がひっくりかえるような、さわぎがおこるであろう」

というおことばだったのである。このことは、世間の人々も、うわさにきいてしつていたので、鳥羽院が権現さまの予言のとおりに亡くなり、崇徳院が鳥羽院にたいしてふかいうらみをもつていられたことをきくにつけ、権現さまのおつげのとおり、今にきつと何か大さわぎがおこるだろうと、しんばいしていたのである。



鳥 羽 院

ことに、鳥羽院のごびようきちゅうにも、あちこちから武士があつまってきたり、武器をつんだ馬や車が、院の御所へはいってゆくようすをみるにつけ、人々の不安はしだいしだいにつのつていったのであった。

宇治左大臣頼長は、藤原忠実の二男であつたが、人からもよく、学問、礼儀、文才ともにすぐれた、りっぱな人であつたので、朝廷でもおもしろい役目についていた。

鳥羽院がなくなつたとき、頼長はさっそく崇徳院のところについて、重仁親王を位におつけになることをすめたので、崇徳院も頼長をたよりにして、いろいろとそうだんをなさつた。

「近衛天皇のあとには、重仁親王を位につけてくださるのがあたりまえなのに、何のすぐれたところもない第四皇子をおつけになつた。そのために、私も重仁親王もかなしみにしずんでいるのだ。今はもう鳥羽院もおなくなりになつたことから、私が天下を自由にしてもよいではないか、世間の人々もそれをのぞんでいるのだ」

崇徳院がそうおっしゃるので、頼長は、



崇 徳 院

「もし崇徳院のおのぞみがかなえば、自分はきっと摂政の役について、思うように政治をとることができる」とたいそうよろこんで、崇徳院のためにいろいろとはねをおったのである。

京の都の人々は、家をいくさの火にやかれてはならないうと、たいせつな道具るいを遠くへはこびはじめたので、院へあつめられる武器をつんだ馬や車のゆきかえりと両方で、みやこの中がなんとなくざわめいてきた。

「鳥羽院がなくなれまだ十日しかたないのに、今までの平和なみやこが、なんというさわがしさになって

きたのだろう」

と、人々は不安とかなしみにしずんでいったのである。

こうして、藤原頼長は、崇徳院にすすめて朝廷に、てむかうためのじゅんぴをいそいだわけであった。これがつまり保元の乱のおこりなのである。

崇徳院のほうのようすは、朝廷のほうへも、もちろん手にとるようにきこえていった。すぐにたくさん武士がよびあつめられた。いちばんききによばれたのが、源義朝であった。義朝はおめしをうけるとすぐかざしれぬほど大ぜいの武將をひきつれてやってきた。そして、みやこのあちらこちらと、手分けしてまもることになった。朝廷ではその夜、会議がひらかれ、手むかいをする人々は、片ばしからとらえて、一人のこらず、流しものにするということにきまったのである。

そのあくる日は、もうさっそく、宇治のほうをまもりでかけた一隊と、京へ上ってくる院のほうの一隊とのちよっとした戦いがあったのである。